



●東海道 三島 ほら貝 広重



●東海道五十三次之内 三島 初代広重 (保永堂版「朝霧」)



●五十三次名所図会 三島 三嶋明神一の鳥居



富士・沼津・三島3市博物館共同企画展

いっぱい

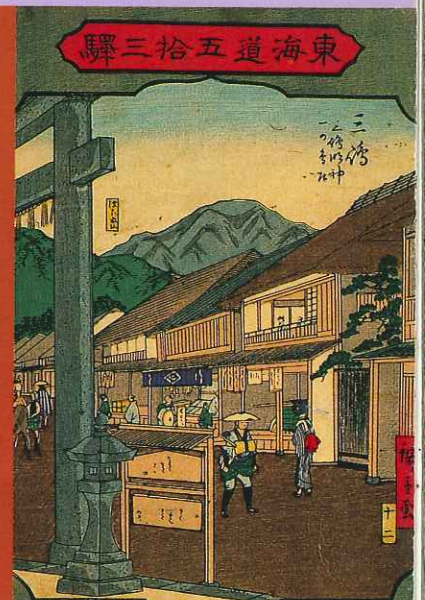
東海道



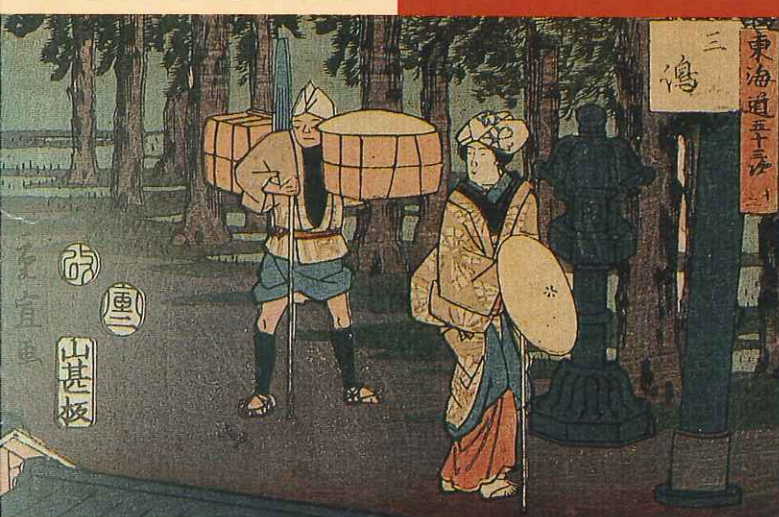
●雙筆五十三次 三島 初代広重 三代豊国



●東海道五十三次之内 三島 おせん 三代豊国
●東海道 箱根三島間 山中とち坊 三代豊国 (役者見立東海道五十三次)



●東海道五十三次 十二 三島 三嶋明神一の鳥居 二代広重



●東海道五十三次 十二 三島 (山基板)



●東海道五十三次 三島 狂歌入り 初代広重 (佐野喜版)

9月14日~11月9日
11月18日~'98年1月18日

三島市郷土資料館 三島駅前楽寿園内
富士市立博物館 富士市広見公園内

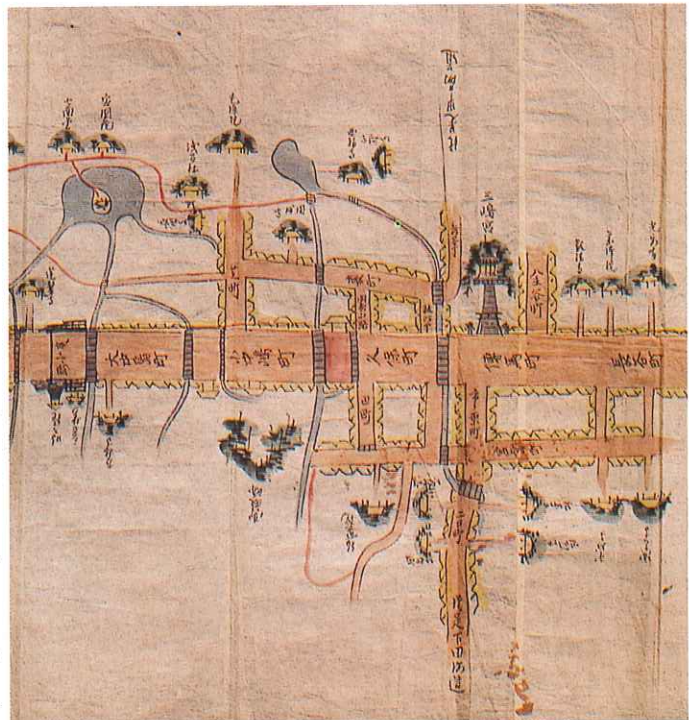
三島宿の特徴 — 四つ辻の町・水の都 —

箱根山という天下に名だたる難所に隣接した三島宿は、上り下りの旅人たちが、とにもかくにも「ほっと」一息つけるところだったという。中でも旅人を喜ばせたのは、こんこんと湧き出す富士の清流が、町中の小川から溢れ出しそうに流れていた光景だった。まさに、命の水に巡り会った思いで、だれと言うともなく「水の都」と呼んだのであろう。

また、三島宿は四つの辻の町である。辻の交点となる要の位置には古くから三島明神（現・三嶋大社）が鎮座し、伊豆や駿東の人々の心の支えとなっていた。この三島の要と周辺を結ぶ主要道が三島という町の歴史を作ってきた。下田往還（三島・豆州一円）、甲州道（三島・甲州一円）、東海道（江戸・上方）は無論のこと、三島と相州を結ぶ矢倉沢通りや根府川通りなどの官道も三島を起点として四方に延びており、そうした道がさまざまな地域の文化を受信、発信する役割を果たしてきたのである。

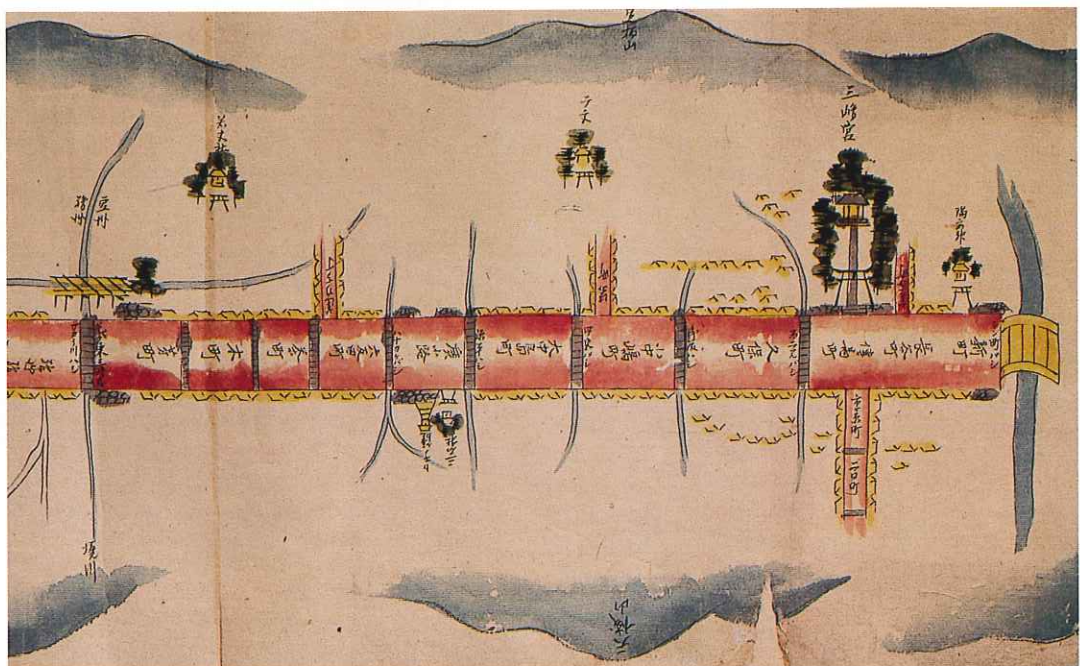
慶長6年（1601）に東海道の宿駅となって以来、三島宿には將軍上洛の際に本陣とした御殿や、牧狩りのための鷹部屋などの施設が作られるなど、街道上の重要な拠点と見なされていた。また、宝暦9年に韮山に代官所が移されるまでは、三島には代官所がおかれており、幕府直轄地の中心都市としての機能も果たしていた。

絵図にも見られるように、三島宿は宿の中央の伝馬町・久保町・小中島町・大島町を中心にして、西町が六反田町・茶町・木町・茅町と発展、同じように東町も金谷町・長谷町・新町と発展し、往還18町20間の宿場であった。この中に、本陣2軒、脇本陣3軒、旅籠74軒が備わり、1025軒の人々が暮らしていたのである。



▲三島宿街道絵図（部分）

▶三島宿街道図



三島宿の本陣

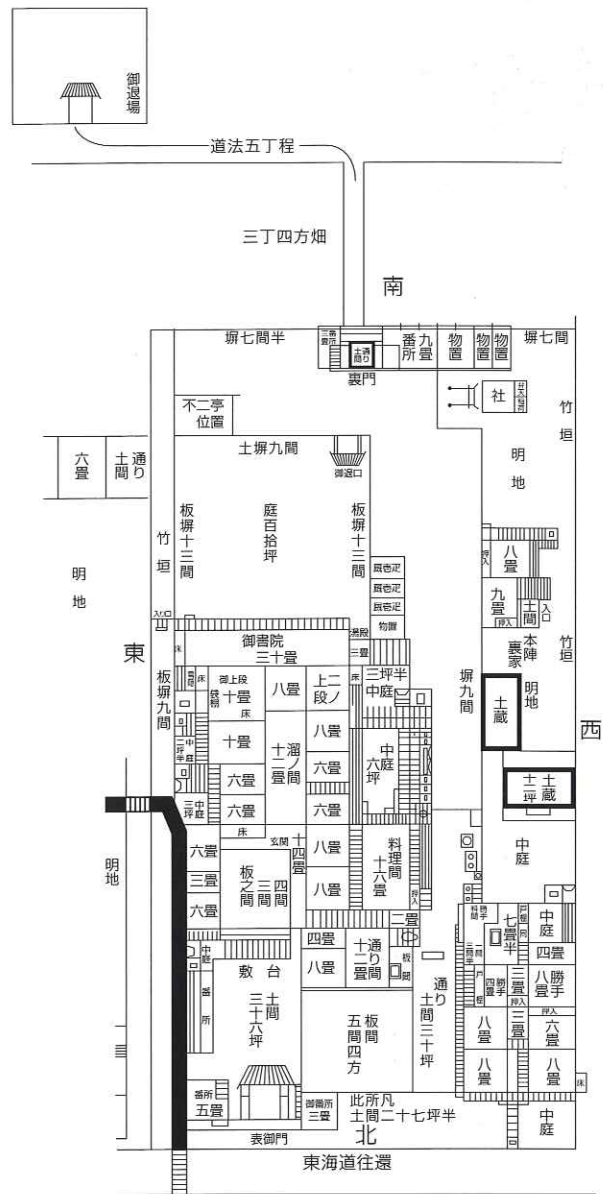
三島宿には宿場のほぼ中央の小中島町（現・本町）に樋口家と世古家の本陣が2軒向かい合うようにあった。両本陣はお互いに「株分け規定」を取り交わし、諸大名、公家、門跡および幕臣や諸藩の武士たちのための宿泊や休業業務を割り振って、街道「御用」を務めていた。

三島宿の本陣はもともと3軒であり、前記の2軒となったのは天保年間以降のことと言われているが、従来あったとされる「弥太夫本陣」についての記録は少なく明らかではない。又、両本陣がいつ設立されたかという点については、世古本陣の記録では「寛永年中7月3日三島本陣はじめて置かれる」という記録がある。

樋口家本陣に残る古文書の中に数点の本陣間取り図があるが、その1点の間取り図によれば、同本陣の屋敷総坪数は848坪で、総建坪は375坪、その中に最も重要な部屋となる上段の間2部屋をはじめ、本陣としての機能を果たすための多くの部屋や施設が整えられていたことが分かる。

また「本陣献立」の文書は、本陣を利用した一般の武家たちが、三島宿本陣でどんなものを食べていたかが分かる興味深い文書である。大名たちが食べた食材に比べれば、比較にならない質素な食事ではあるが、「一汁二菜」に「香の物」、「飯」の献立の中に「こうりこんにゃく・いしやきとうふ」など地方色のある食べ物も供されていたのである。

樋口家本陣の間取り (樋口本陣間取図より作成)



▲ 樋口本陣の門 現在円明寺山門となっている。



▲ 本陣料理の復元 石焼きとうふ、こおりこんにゃく、こごり身、いも、すこんぶ、肴(さかな)などが供されていた。

吉原宿 (江戸から14番目の宿場)

吉原宿は、慶長6年(1601)に東海道の宿場として江戸幕府から指定を受け、吉原湊(現在の田子の浦港)を渡す渡船場の付近でその機能を果たしていた。ところが津波や強風の被害が相次ぎ、宿場は寛永16年(1639)、延宝8年(1680)の2度にわたってより内陸へと移転を余儀なくされ、その結果現在の吉原本町の位置で宿場として発達していった。

〈名勝・左富士の誕生〉

吉原宿の移転により、東海道は大きく経路を変えることになった。このため、江戸から京都へ旅をすると常に右側に見えるはずの富士山が突然左側に見える場所ができ、名勝・左富士が生まれたのである。



▲初代広重画 東海道五十三次之内 吉原



▲現在の左富士

〈名物・富士の白酒、うなぎの蒲焼き…〉

新しい吉原宿は、ほかの村々から少しずつ分けられた土地に形成される状況になったことから、ほかの東海道の宿場に比べて石高は少ない方だった。伝馬100疋、人足100人という宿場に課せられた伝馬役を果たすことは難しい状況にあるため、周辺の5ヶ村を宿付地方村に、さらに伝法村を加宿に指定して人馬を負担させ、宿駅業務を運営していた。

また幕末の吉原宿では、脇本陣扇屋の伊兵衛が間屋役を退いたのち鈴木香峰の名で山水画に名声を博するなど、文化人も輩出している。



吉原宿の名物
肥後ずいき、ねぎ雑炊
間宿(原一吉原間)・
柏原の名物
うなぎの蒲焼き
間宿(吉原一蒲原間)・
本市場の名物
富士の白酒

▲初代広重画 東海道五十三次之内 吉原(部分)
(白酒の看板を掲げた茶屋)



原宿の成立 (江戸から13番目の宿場)

原宿も沼津や三島、吉原と同じように慶長6年には宿場として機能していた。しかもこの宿場は、すでに中世頃から、原中宿として知られていた。

原宿はいつも帯のように長く延びる浮島沼と富士の勝景で知られてもいる。

この宿場と吉原宿にいたる間の富士の姿は特に多くの旅人の心をとらえたようで、浮世絵などに描かれる原宿には、きまって富士がどっかと描かれている。浮島沼と愛鷹山の背後に富士は描かれるが、旅人をほっとさせる情況だったに違いない。



▲東海道五拾三次之内 原 朝之富士 [保永堂版] 初代広重画

〈原宿の名物〉

原宿は吉原宿との間の柏原の立場と並んでウナギが名物として知られていた。ウナギは蒲焼きにされ、旅人に出されたが、そのウナギは浮島沼から調達された。浮島ではかつて柴漬け漁なども盛んで、ここでは鯉や鮒、ウナギもよく捕獲された。

尾張藩の藩士が江戸表に上京の折り、立ち寄る先々で、その情景を絵に納めているが、柏原の立場では、繁盛するウナギが描かれている。弥次さん、喜多さんはこの宿で蕎麦を注文している。



▲「東街便覧」より



沼津宿の成立 (江戸から12番目の宿場)

かつて黄瀬川界限には、黄瀬川宿と呼ばれた宿場があった。そこはすでに海道記や春能深山路など紀行文にも表れ、古くから宿場として知られていた。その黄瀬川宿も時の流れとともに徐々に廃れ、その後は1 kmほど西にいった車返宿が隆盛期を迎えるようになる。おそらく中世も末のことと思われるが、車返宿が機能していた頃、徳川幕府は天下を統一し、まず手始めに交通網の整備に取りかかる。そうしたなかで宿駅の整備もいち早く進められ、慶長6年には、三島宿などと並んで、沼津宿も宿駅として認められ、家康から伝馬の定が発給されている。

その頃、三枚橋城はまだ存在しており、往還道も城の北側、いまの東海道線のあたりを通過していたと考えられる。一体、家康が指定した最初の沼津宿は何処だったろう。

東海道名所改正道中記 十四 足柄の景 沼津▶

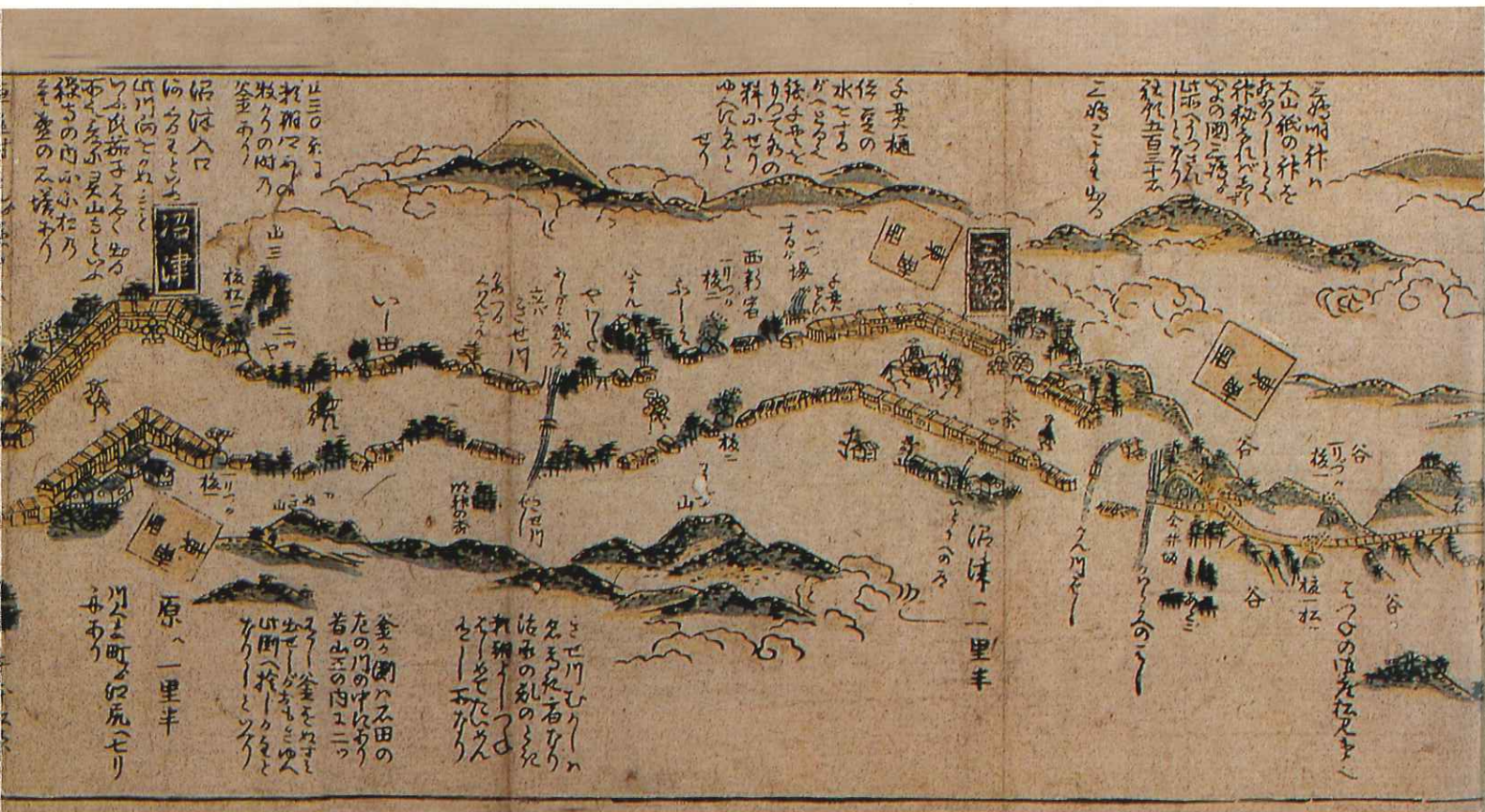


▲東海道五十三次之内 沼津 名物鯉節を製す 初代広重画

〈名物・鯉節〉

広重の浮世絵を見ると、沼津の名物は鯉節であったことが分かる。浮世絵の何枚かにそのことは記されているが、沼津の鯉節はかなりの伝統をもっていたようである。

奈良時代頃の税につけられた木簡を見ると、この地域の特産物にカツオの加工品のあったことが知られ、なかには鯉節もどきのものもある。



三島宿 (江戸から11番目の宿場)

三島は古くから伊豆の国府であり、また伊豆一ノ宮である三島明神（現在の三嶋大社）の門前町として栄えてきた。東海道が整備されると、険しい箱根越えのために多くの旅人が三島宿に泊まった。三島宿からは下田街道・根府川通り・矢倉沢通りなどの官道も南北に延びるなど交通の要衝の町として賑わっていた。

〈名勝・三島明神と千貫樋〉

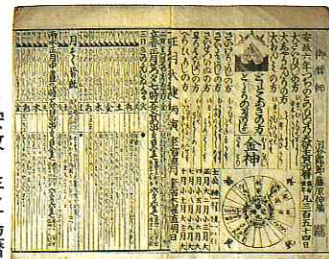
宿の中央にある三島明神で、旅人は旅の安全を祈願したものであった。ここで正月に催される「お田打」（田祭）は稲の豊作を祈願する予祝神事として古くから社家の人々によって行われてきた祭りで、広重の浮世絵の題材にもなっている。

(東海道五十三対・三嶋祭の図 写真下)

宿の北には富士山の雪溶け水が地下水となって湧出する池泉一小浜池・浅間神社・菰池・白滝等があり、これらの水がいく筋もの流れとなって東海道を横切っていた。豊富な水量を誇った小浜池（現楽寿園内）の水は木造の水樋の千貫樋で駿河国の村々へも分配されていて、その光景は街道の風物として知られていた。



▲東海道五十三次三島（隸書版）



▶安政6年三島暦

〈名物・三島暦と塩鮎〉「三島暦」は鎌倉時代頃より暦師河合家から発売され続けた地方暦である。

江戸時代には木版文字の美しいことで知られた三島暦は、みやげ物として多くの旅人に買い求められた。

「塩鮎」は三島宿の本陣樋口家の文書によく登場する。伊豆加殿などから手に入れたものを、お中元として、日頃つきあいの深い大名などに贈っている。



▲東海道五十三対



▲千貫樋（三島宿風俗絵屏風）

▼東海道分間絵図（富士川～箱根部分）



53次数字で見れば…

	宿名	石高		宿名	旅籠数		宿名	家総数		宿名	人口総数
1	鳴海	3645.5	1	熱田	248	1	府中	3673	1	大津	14892
2	島田	2970.9	2	桑名	120	2	大津	3650	2	府中	14071
3	三島	2632.4	3	岡崎	112	3	熱田	2934	3	熱田	10342
4	水口	2464.4	4	四日市	98	4	桑名	2544	4	桑名	8848
5	戸塚	2326.6	5	小田原	95	5	四日市	1811	5	四日市	7114
6	沼津	2253.5	6	浜松	94	6	浜松	1622	6	島田	6725
7	保土ヶ谷	2126.6	7	品川	93	7	岡崎	1565	7	江尻	6498
8	原	1767.0	8	戸塚	75	8	品川	1561	8	岡崎	6194
9	関	1750.2	9	三島	74	9	小田原	1542	9	浜松	5964
10	神奈川	1727.0	10	川崎	72	10	島田	1461	10	品川	5890
11	石部	1719.9	11	草津	72	11	神奈川	1341	11	神奈川	5793
12	草津	1571.4	12	大津	71	12	江尻	1340	12	小田原	5404
13	藤沢	1559.8	13	鳴海	68	13	吉田	1293	13	沼津	5346
14	丸子	1497.1	14	保土ヶ谷	67	14	沼津	1234	14	吉田	5277
15	桑名	1348.9	15	大磯	66	15	藤枝	1061	15	藤枝	4425
16	土山	1348.6	16	吉田	65	16	見附	1029	16	金谷	4271
17	庄野	1332.7	17	御油	62	17	三島	1025	17	藤沢	4089
18	川崎	1321.4	18	赤坂	62	18	金谷	1004	18	三島	4048
19	藤枝	1279.6	19	吉原	60	19	掛川	960	19	見附	3935
20	知鯉鮒	1179.0	20	神奈川	58	20	藤沢	919	20	鳴海	3643
21	見附	1175.8	21	見附	56	21	鳴海	847	21	新居	3474
22	四日市	1145.3	22	沼津	55	22	新居	797	22	掛川	3442
23	岡崎	1123.0	23	平塚	54	23	水口	692	23	大磯	3056
24	亀山	1076.4	24	金谷	51	24	大磯	676	24	保土ヶ谷	2928
25	蒲原	1065.4	25	江尻	50	25	吉原	653	25	戸塚	2906
26	白須賀	1063.6	26	袋井	50	26	関	632	26	吉原	2836
27	品川	987.1	27	藤沢	49	27	戸塚	613	27	白須賀	2704
28	江尻	947.5	28	島田	48	28	白須賀	613	28	水口	2692
29	赤坂	864.1	29	坂之下	48	29	草津	586	29	蒲原	2480
30	金谷	813.8	30	土山	44	30	亀山	567	30	舞阪	2475
31	御油	706.5	31	府中	43	31	保土ヶ谷	558	31	川崎	2433
32	石薬師	699.8	32	蒲原	42	32	川崎	541	32	草津	2351
33	平塚	692.8	33	関	42	33	舞阪	541	33	岡部	2322
34	二川	677.6	34	水口	41	34	蒲原	509	34	平塚	2114
35	興津	638.4	35	二川	38	35	岡部	487	35	関	1942
36	吉田	570.9	36	藤枝	37	36	石部	458	36	原	1939
37	大磯	464.3	37	箱根	36	37	平塚	443	37	興津	1668
38	岡部	458.5	38	藤川	36	38	原	398	38	知鯉鮒	1620
39	藤川	434.8	39	知鯉鮒	35	39	土山	351	39	石部	1606
40	由比	340.5	40	興津	34	40	赤坂	349	40	亀山	1549
41	新居	174.7	41	日坂	33	41	二川	328	41	土山	1505
42	舞阪	170.2	42	由比	32	42	興津	316	42	二川	1468
43	日坂	127.7	43	石部	32	43	御油	316	43	赤坂	1304
44	吉原	101.7	44	掛川	30	44	藤川	302	44	御油	1298
45	坂之下	16.5	45	舞阪	28	45	知鯉鮒	292	45	藤川	1213
46	掛川	0	46	岡部	27	46	石薬師	241	46	石薬師	991
47	小田原	0	47	白須賀	27	47	丸子	221	47	庄野	855
48	袋井	0	48	新居	26	48	庄野	211	48	箱根	844
49	大津	0	49	原	25	49	箱根	197	49	袋井	843
50	熱田	0	50	丸子	24	50	袋井	195	50	丸子	795
51	箱根	0	51	亀山	21	51	日坂	168	51	日坂	750
52	浜松	0	52	石薬師	15	52	坂之下	153	52	由比	713
53	府中	0	53	庄野	15	53	由比	160	53	坂之下	564

(表紙 浮世絵 望月宏充氏蔵)



1997.9.14 編集・発行

- 三島市郷土資料館
- 沼津市歴史民俗資料館
- 富士市立博物館

三島市一番町19-3 楽寿園内 ☎0559-71-8228
 沼津市下香貫島郷2802-1 ☎0559-32-6266
 富士市伝法66-2 ☎0545-21-3380